



薬学部は徳島大学にしかなく、城東では上位クラスしか合格できなかった。勉強嫌いがゆえに浪人はまっぴら、と猛勉強し、なんとか、合格。4年生の時、大手製薬会社への就職が決まっていたが、大学院ができるので一期生が必要という話があり、内定を断ったものの、結局大学院はできず、講座の助手として大学に残ることに。

「だけど、何の力もないのに、つい何か月か前まで1級下の後輩だった学生に講義をするのは如何なものかと思いはじめたんです。それで、先生を続けるならもっと自分自身が学習したほうがいいと思って」大阪大学の大学院へ進学。専攻は生化学。

その後、国家公務員試験に合格し、厚生省国立衛生試験所に配属。

「あまり人付き合いが得意でないので、研究所はその意味で合ってたんです。中・高では不得手だった化学や生物も、次第に興味がわいてきました。課題にきちんと向き合う。その積み重ねが自ずと成長に繋がるのかも」

幾度となく自身のことを勉強嫌いだと言うものの、好奇心は旺盛。世に先駆けてバイオ医療品研究など、新

しいことに挑戦を続け、国立医薬品食品衛生研究所副所長、大阪大学大学院医学研究科招聘教授（現在に至る）、近畿大学薬学総合研究所長・顧問（至2019・3）、一般財団法人化学及血清療法研究所理事長・所長（至2017・6）などを経て、2019年にはあらためて国立医薬品食品衛生研究所客員研究員となる。

本誌取材の直前、早川さんは国際会議開催の仕事に追われていた。さらにその後は「厚労省の再生医療に関する大変重要な会議があり、iPS細胞の山中伸弥教授や角膜の西田幸二教授、心臓の澤芳樹教授、神経細胞の岡野栄之教授他、その分野のトップが集まって議論する予定」と多忙を極めていた。にもかかわらず、細やかな気配りの人なのだろう。門外漢の取材陣を心配し「少しは睡眠が必要ですので、中途半端で整理もよくできていませんが、とりあえず」と自身に関する資料を用意し送ってくれたのだった。

バイオ医薬品研究を始めて35年余。